＝調査報告＝

四川省涼山彝族自治州西昌市・昭覚県後漢石刻調査記

新　津　健一郎

2018年６月19日から23日にかけて、筆者は籾山明氏と共に四川省涼山彝族自治州西昌市・昭覚県において後漢昭覚石表をはじめとする漢代遺跡・文物を調査する機会を得た。また、経由地の同省成都市では成都博物館を見学することができた。本稿は、行程と実見の結果に若干の考察を付して現地の状況を記録するものである。

一、涼山彝族自治州の概要と調査の目的

涼山彝族自治州は四川省の西南部、標高1500−3000ｍの山岳地帯に所在する。大涼山山塊の河谷に形成された壩子に都市が点在する地形である。安寧河をはじめとする大規模河川はほとんどが南北方向に流れるため、交通路及び都市・村落も概ねそれに沿って分布する。銅や鉄、塩などの資源に富み、現在ではトウモロコシ・ジャガイモ・米・果物などの栽培も盛んである。州都は安寧河沿いの西昌市にあり、今回訪れた昭覚県はその東、約100㎞の地点に位置する。

涼山自治州の人口の約五割を占めるのは彝（ロロ）族だが、他にチベット族、回族、ミャオ族なども多数居住し、彝語（ビルマ系の言語で、独自の文字体系を持つ）やチベット語を話す住民も多い。長く土司による統治が行われ、なかでも彝族社会では20世紀に至るまで一種の奴隷制的社会が営まれた。涼山地区ないし彝族はこうした特性のゆえに民族学・言語学分野からしばしば注目を受け、フィールドワークを含む研究の対象となってきた。日本語で容易に入手できるものに限っても、鳥居龍蔵『中国の少数民族地帯をゆく』（朝日新聞社、1980年：原著『人類学上より見たる西南支那』冨山房、1926年）、西田龍雄『倮儸譯語の研究：ロロ語の構造と系統』（松香堂、1980年［初版1979年］）、曽昭掄（八巻佳子訳）『中国大凉山イ族区横断記』（築地書館、1982年）、白鳥芳郎「西南中国少数民族の一考察：彝（倮儸）族と苗族」同著『華南文化史研究』（六興出版、1985年）、福田和展『涼山彝族の言語と文字』（三重大学出版会、2011年）といった成果がある[1]。

古代史分野において専ら涼山を論じた著作は、筆者の知る限り今のところ日本語ではほぼ皆無であるが[2]、近年中国では歴史時代を含む考古資料集として凉山彝族自治州博物館・凉山彝族自治州文物管理所編『一個考古学文化交滙区的発現：凉山考古四

十年』（科学出版社、2015年）、欧語圏ではアンケ・ハイン Anke Hein 氏のモノグラフ *The Burial Record of Prehistoric Liangshan in Southwest China : Graves as Composite Objects*（Springer, 2017）がそれぞれ刊行され、歴史・考古学研究の対象として注目されつつある。

歴史上、涼山一帯に中華帝国の支配がはじめて及んだのは前漢の元鼎 6（前111）年のことであった。とはいえ、その後も郡県の下で在来の集団は維持されたようであり、支配権力が動揺を見せるや在地集団の有力者が離反を企てるということが繰り返された。莽新時期の「邛人」長貴の反乱、後漢末における摩沙夷の塩井封鎖、諸葛亮南征のきっかけとなった「越嶲夷王（越嶲高叟大帥）」高定（高定元）の称王などがその例である[3]。

今回、調査の主目的はその後漢末期に刻まれた石刻（「石表」）を実見することにあった。「石表」は二件からなり、それぞれ光和 4（181）年、初平 2（191）年の紀年を持ち、公文書と思われる文章を刻む[4]。発掘簡報及び史料集によれば、1983年に彝族の農地から石表 1 件、石闕残石10件、「石獣（獅子）」の足部分の残石が出土した。獅子の胴体部分も発見されていたが、不吉であるとして埋められてしまっていたという。1988年、涼山州博物館・昭覚県文化局によって改めて発掘が行われ、新たに初平二年石表及び石闕残石が出土した。資料は昭覚県に保管されていたが、2001年から修復が行われ、完了を機に昭覚県図書館に展示されるとともに省文物保護単位としての指定を受けた。後漢末、中央権力の混乱とともに「夷」の自律性が顕在化した時期の貴重な史料だが、これまで全体の形状を明らかにした報告書を得ず、専ら拓本及びそれに基づく翻刻によって議論されてきた。本調査では同史料の形態及び出土地に関する情報を得ることを目的とした。結果として、昭覚県図書館において遠巻きながら原石を実見し、出土地（昭覚県四開郷）の景観や関連資料についても知見を得ることができた。以下、行程に沿って述べていく。

二、行程と実見の記録

涼山彝族自治州に入るルートは陸路（自動車道・鉄道）、空路がある。高速道路（G5）は北に成都方面、南は昆明方面に通じる。成都市-西昌市間は約450キロメートル、 6 時間ほどである[5]。鉄道の場合も成都-昆明間を走る列車を利用することになる。なお、2018年 6 月段階で高速鉄道（高鉄）は未開通であった。空路の場合は西昌青山空港を利用する。成都との間を往復する便が多く、昆明・南寧・重慶・北京への便も運航されている。今回の調査では北京から成都を経由して空路で西昌に入り、自動車を利用して日帰りで昭覚を訪れた後、航空便で北京に直行するという経路をとった。

▼６月19日（火）北京晴・成都晴／曇：北京から成都への移動・成都博物館見学

８時15分北京発、中国国際航空CA4112便を利用して成都に移動し、午後から成都博物館を参観する予定であった。筆者は前日まで人民大学にて開催されたワークショップ「編纂与構建 Ancient Historiopragy in Comparison」に参加し、同大学滙賢酒店（海淀区）に滞在していた。また、籾山明氏は前日まで同区の清華大学にて集中講義を担当され、空港カウンターにて待ち合わせの予定であった。

ところが、蘇州街駅から始発の地下鉄に乗車してインターネット上でチェックインカウンターを確認しようとしたところ、CA4112便は本日欠航だという。ともかく空港に辿りつき、籾山氏と合流して国際航空のカウンターで尋ねると、午後便への変更を提示された。結局、午前中は首都国際空港にて現地の情報収集及び面会予定の方への連絡に費やされた。代替便のCA4198はほぼ定刻（13時）に首都国際空港を離陸し、約３時間で成都双流国際空港に到着した。端午節の連休明けであったためか、機内にはいくらか空席が見られた。成都到着時刻は16時を回っており、ただちにタクシーで天府広場西側の成都博物館に向かった。

成都博物館は2016年に開館した。地上六階、地下一階の巨大な建物であり、成都市中心部、天府広場の西側に面する。開館時間は比較的長く、午前９時から夜８時半まで（１時間前に入館停止）である。入館時は一階エントランス南側のチケットブースで身分証を提示して入館券を受け取り（無料）、必要であればブース後方のロッカーに荷物を預けて、エントランス北側の展示エリアに入る。常設展示は通史（先秦・両漢・唐宋・明清・近世）、民族・影絵・人形の８区画から成り、概ねフロアごとに分かれている。

成都空港から博物館まではタクシーで30分ほどであった。まず、同館顧問・李連氏に面会し、３階（常設展示先秦・両漢エリア）を参観した。飛行機欠航によって十分な参観時間を確保することができなかったため、20日午前中にいま一度成都博物館を見学することとした。その後、成都市文物考古工作隊主任・謝涛氏、成都博物館科技信息中心主管・段楊波氏と意見交換、打ち合わせを行った。李連氏からは現地での安全に十分注意するようアドバイスを頂き、謝涛氏は涼山州博物館館長・唐亮氏に我々の来訪を伝えて下さった。その後、璞門麗庭酒店（金牛区）に移動して宿泊した。

▼６月20日（水）成都晴／曇・西昌晴：成都博物館見学・成都から西昌への移動

筆者らの宿泊した璞門麗庭酒店は成都市街の北部に立地した。９時前にホテルをチェックアウト後、タクシーに乗車して20分ほどで博物館に到着し、３階・４階（常設展示両漢・隋唐エリア）及び営造学社による古建築研究をテーマにした企画展「影子之城：営造学社鏡頭下的広漢」を見学した。段楊波氏のご配慮により展示ガイドの解説を受けることができた。

前日の参観分も含め、重点的に実見した遺物を列挙すると以下の通りである。成都商業街船棺葬戦国墓遺物（棺・漆器類）[6]、老官山前漢墓出土医書竹簡・公文書（？）

木牘・織機及び経脈漆人[7]、金堂李家梁子漢墓出土石羊、天府広場出土石犀（尻に刻字があるものの判読不能）、東御街出土後漢碑（李君碑・裴君碑）、漿洗街桓侯巷成漢墓出土陶俑、以上3階。成都城・地方志に関するパネル展示、明蜀王府遺構と復元模型、以上4階。また、企画展では多数の古写真及び前近代の都城関連遺物（建築明器等）を実見した。

このうち、老官山前漢墓は2012年に地下鉄工事によって発見されたもので、現在は成都地下鉄3号線軍区総医院駅となっている。発掘簡報によれば墓葬は4基からなり、木製品を含む多数の遺物が出土した。医書竹簡と経脈漆人は扁鵲派医学思想に関連するとの説もあり、漢代医学・思想研究において注目を受けている[8]。また織機模型は技術及び蜀錦文化との関連から重要な資料とされる。木牘（展示解説によれば公文書と巫術関連の二種）の内容も興味深いが、訪問時点で写真版・移録は未刊行であり、一部をパネルとして見学できるのみであった。今後、正式な報告書の出版が望まれる。

西昌へ向かう航空便は午後2時半に離陸の予定であったから、11時半過ぎに博物館を辞し、段氏に御礼を述べて車で成都双流空港に向かい、前日と同じく30分ほどで到着した。今回搭乗したCA4592便は上海発・成都経由・西昌行きで運行しているため遅延が心配されたが、空港に到着してみると予定通りとのことであった。

12時50分ごろ、事前の打ち合わせ通り旅行ガイドと合流して三名でチェックインし、制限エリア内の料理店で昼食を取った。搭乗はスムーズであり、ほぼ予定通り離陸、1時間ほどで西昌青山空港に到着した。西昌空港は比較的小規模な地方空港であり、預け入れ荷物の受取りには10分とかからなかった。同市の公共交通機関はバスとタクシーに限られるため、今回は事前に車両を手配しており、ガイドとともに乗車して空港の南東約15㎞の市街地に向かった。宿泊予定の明珠大酒店は市街南西部に位置し、空港から30分ほどで到着した。チェックインし、近隣の料理店で夕食をとって解散した。

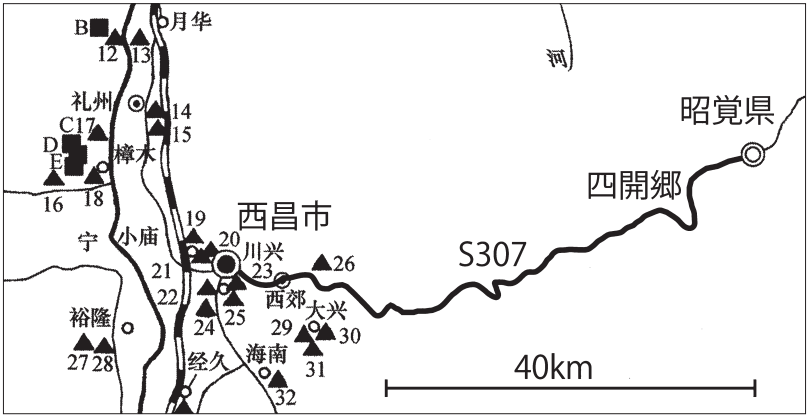
今回、筆者らは事前に涼山州博物館の唐亮氏と連絡をとっており、前日には謝涛氏からも来訪を伝えて頂いていた。本日夕食を共にすることも提案したが、唐亮氏のご多忙により翌日朝、昭覚への出発前に博物館オフィスを訪問することとなった。

▼6月21日（木）西昌晴・昭覚晴・移動中霧／雨／晴：昭覚県調査

西昌市から昭覚県への移動は自動車道（省道S307）に限られる。前回訪問時には工事中であったが、今回は事前に全通したとの情報を得ていた。バスも運行されているようで、移動中には何度か中・長距離路線バスとすれ違った。筆者らは四開郷付近の遺跡を見学するため専用車を手配して昭覚に向かった。運転手・車両は前日と異なり、昭覚付近の出身とのことで、現地の言語（彝語か）を解する人物であった。なお、事前に得た情報として、外国人が涼山自治州内を旅行するにはガイドが必須であるというものがあったが、旅行時点では正確でなかったようであり、22日はガイドなしで行動した。

午前９時に宿を出発し、まず西門坡街に位置する唐亮氏のオフィスに向かった。筆者らにとっては二度目の訪問であった。涼山州博物館は展示施設を持たず[9]、表通りから一本入った住宅街の中の一棟が事務所とされ、収蔵・研究施設が置かれている。一階にスタッフの控室があり、二階以上が資料の保存に充てられ、最上階に唐亮氏のオフィスがある。一階で訪問の目的を告げたところ、スタッフの方も筆者らの訪問を了解しており、スムーズに面会ができた。

唐亮氏によれば、四開郷一帯では漢代墓葬・遺跡が発見されているものの発掘後に埋め戻されるなどしていて地上に痕跡は残っていないため案内がなければ辿りつくことは難しく、野外遺跡の本格的な見学調査には許可が必要とのことであった。また石表は昭覚県に置かれているものの、非公開との情報を得た。些か残念ではあったが、遺跡自体については筆者らが事前に入手していたデータで概ね誤りなかったようであったため、ともあれ可能な限り接近すべく、昭覚県に向けて出発することとした【地図①】。



【地図①：西昌市-昭覚県間交通路（『一個考古学文化交匯区的発現』図 3. 3-4を筆者改変。四角・三角及び英数字・明朝体地名は大石墓等の分布（原図による）。今回の行程（S307）は太線部。）】

博物館を辞し、９時30分すぎに馬水河街との交差点でガイド・車両と合流した。左手に明清期の城壁を見ながら濱河路を通過し、市街東部に出てS307号線に乗った。西昌市は標高約1500ｍ、昭覚県は同約2000ｍ、昭覚県西側に位置する四開郷は約2100ｍだが、省道は山岳を横切るように走っており、最も標高の高い所では約3000ｍに達した。西昌市街を出てしばらくはのぼりの山道で、霧がかかっていた。しばらくして標高2500ｍほどになると木々が少なくなり、山肌が多く露出するようになる。左手に博什瓦黒岩画（南詔・大理時代）の標識が見えたが、今回は時間の制約により見学で

きなかった[10]。

玄生壩・瓦布拉達なる集落を通過し、曲がりくねった道路を進んでいく。峰とそれらに挟まれた低地が交互に現れ、少し開けたところには農地・家屋が見える。山地・丘陵と耕作地からなる景観は日本の農村にも似る。所によっては牧草地となっており、羊の群れが見えた。さらに東に進むと標高3200ｍの峰を抜けて解放郷に至る。ここまでで行程はほぼ五割である。省道は北西に向かい、西洛河と並行しながら河谷を走り、東に向きを変えて山地に入る。再び3000ｍ近い高所を蛇行しながら通過し、小さな平地（梭梭拉打村）を過ぎると両側に切り立った山が現れる。これを抜けて四開郷の所在する平地に到達したのは午前11時頃であった。

四開郷の東には三湾河の支流が合流するポイントがある。道路は川に沿って進み、谷を抜けたところで三湾河の本流を渡る（好谷大橋）。その先では北側の山塊から舌のように突き出した丘をめぐるように三湾河が南に大きく屈曲し、川の周りが平地となっている。また、屈曲部の南端で南側から流れてくる支流と合流するが、この支流沿いには比較的大きな平野が開けており、合わせて約20平方㎞となる。

漢代の遺跡・遺物が多く発見されているのはこの一帯である。まず、四開郷人民政府の東西の丘には、抵頗此（軍屯）遺跡・各則羊棚石棺／磚室墓群・洼苦乃姐石棺／磚室墓群などが所在する。1986年に「軍司馬印」「軍仮司馬」などの印章が採集されたのもこの付近とみられる。三湾河を渡って好谷村（洒瓦黒洛村[11]）一帯は黒洛社遺跡と呼ばれ、石表の他に竹里社（黒瓷山）磚室墓・木措（錯）乃姐石棺墓・普拉波石棺墓・濮蘇波涅石棺墓などが分布し、画像磚の出土も知られる。高地の南端、省道と三湾河に挟まれた丘には俄巴布吉石棺墓が所在する[12]【地図②：四開壩子一帯の道路・河道と遺跡群（本文末尾）】。

唐亮氏の教示により墓葬の実見が困難であることが分かったため、筆者らは石表出土地点の付近に向かうことを試みた。11時15分ごろ、好谷大橋東側で停車し、ガイド氏が近隣の人々に石碑の出土地点を知らないかと尋ねてくれた。停車地点は集会所のような建物で、門扉には「四開郷洒瓦洛且博村村民委員会（及びその彝語表記）」とあった。ここでは石刻について有力な情報を得ることはできず、しばらく走ることとなった。道中路面が濡れているところもあったが、好谷付近では晴れ間がのぞいていた。１㎞ほど行くと右手に数人の男性がたむろする姿があり、ガイド氏が尋ねるとそのうちの一人が石表を知っているという。しかも、住居が近くにあり、案内ができるとのことで、車に同乗して頂いて出土地点を目指すこととなった。

男性の道案内によって集落内の小道に入り、行き止まりまで進むと駐車場のような空間が設けられていた。停車して畑に降り、２ｍほどに育ったトウモロコシを掻き分けながら進んでいくと、120ｍほど進んだところで男性が立ち止まり、ここが出土地点であるという[13]。30年ほど前、考古発掘が行われたことをよく覚えているそうであった。今でも土中から文物が現れることがあるというが、畑の中だけでなく畦道も植物に覆われている状況では表面の様子を覗うことは困難であった。

停車地点まで戻ると、男性は自宅がその裏手（小道を挟んで畑の反対側）とのことで、御礼を申し上げて別れた。周囲の民家には版築のような土壁をめぐらすものが多かったが、そのうち一箇所は壁の崩れたところに磚が挟まっていた。元々塗りこめたのか、崩れたところに差し込んだのかは定かでないが、菱形の文様が刻まれており、漢代の墓磚と判断されるものであった【図版①・②】。

【図版①（左）：壁に塗り込められた墓磚（筆者撮影）、図版②（右）：三湾河地区採集墓磚[14]】

予想外の収穫を得て四開郷を出発したのは11時40分ごろ、そこから山間を縫うように進んで昭覚県に到着したのは12時過ぎであった。市街地に入り、人民巷付近の料理店で昼食、休憩。13時頃、人民中路沿いの展覧館（文化館・図書館）[15]に移動した。同施設はいくつかの文献で「石表」の所蔵先として言及されていたが、施設名・所在地には混乱が見られた。そこで、事前に旅行会社・ガイド氏に事情を伝え、それらしき施設があれば見学できるよう依頼してあったが、事前に得た回答は昭覚県図書館の建物は改修工事こそ完成しているものの引き渡しが終わっておらず、閉館中とのことであった。

料理店から200ｍほどのところに、広場を前に立つ二階建ての建物があった。二階とはいえ天井が高いため、近くの住宅と見比べると３－４階建てに相当しそうな丈であり、正面上部には大型電光掲示板が設置され（休止状態）、両側の壁には民族衣装と思われる装いの人々を描いたレリーフが設置されていた。看板等は見えなかったが、図書館の入る建物であったとみられる。建物手前には正面入口を挟むように二台の自動車移動図書館（「流動図書車」）が停まっていた。

正面入口に近づいていくと入口のガラス越しに展示ケースが見えた。近寄ると、エントランス部分に石闕を模ったケースが設けられ、三点の石造物が展示されていることがわかった。正面扉は固く施錠されて近づくことはできなかったが、外側から扉のガラスにカメラを当てて展示プレートを拡大すると、向かって左から順に初平二年残碑（2007年報告書編号 S2）・光和四年石表（同 S1）・麟鳳碑（同 S9）と読み取れた。

間違いなく、昭覚石表及び共伴石刻であった。

展示ケースの周囲には段ボール箱や資材が積み上げられ、開館前といった様子であった。エントランスには建物の両翼からも入ることができるようになっていたが、チェーンをかけて封鎖されていた。レリーフのある壁面は他の壁よりも前に張り出しており、小部屋が設けられていた。小部屋に出入りする人に声をかけたが、鍵がないため扉を開けることはできないという返事であった。近づいて観察することができないのは残念であったが、形状を把握することは十分に可能であった。さらに、ガイド氏がどこからか椅子を調達してくれ、またガラスが破損して直接にケースを見通せる箇所があったことにも助けられた。

これにより、従来の拓本・報告書からは不明・不透明であったいくつかの情報が得られた。第一に、初平二年残碑と光和四年石表とは明らかに形状が異なり、残碑は上部にほぞと思しき突起をもつ。第二に、石表は柱状の石造物だが奥行きがある。目測だが最大で正面幅（約60㎝）の1.5倍程度のように思われた。ほぼ中央で水平に断裂が走っており、横方向からみると、裏側は断裂部に向かって抉れたような形状になっていた。なお、碑石は明らかに上下に割れており、どのように接合状態を支えているのかは不明である。最後に、麟鳳碑は刻画部分を平らに削った痕跡があり、同様に刻字帯を整えている初平二年残碑と同様であり、かつ刻字部分について特段整形の痕跡が見られない光和四年石表とは対照的であった。

14時過ぎに昭覚県を出発、往路を引き返した。途中、四開郷手前の谷で停車してもらい、地形を写真撮影（14時17分ごろ）。道路が切り立った山を抜けて平野に入る格好になっている。停車した道路わきの空き地では養蜂が行われていた。西昌市まで戻り、ホテルに到着したのは16時頃であった。ガイド（本日まで）・運転手と別れて部屋に戻り、荷物を整理した後、夕食をとり解散。

▼６月22日（金）晴／曇：西昌市内調査

本日の調査対象は濾山景区に所在する涼山奴隷社会博物館及び光福寺境内の地震碑林であった。奴隷社会博物館に石表の複製品が展示されているという事前情報があった。濾山景区までの移動にはタクシーを利用した。西昌市のタクシーは青緑色の車体が目を引く。市街地にはある程度流しのタクシーが走っており、ホテル前（航天大道）を９時に出発し、約７㎞を20分で走り、邛海のほとり、海浜中路と濾山路の交差点に到着した（20元）。タクシー運転手によれば、濾山景区に入るには濾山路口で入場券を買い、ムーバーに乗るのだという。景区内には博物館・寺院の他にも二三のスポットが点在し、濾山頂上には展望台がある。各スポットを結ぶ坂道は山肌を蛇行しているが、それでも急傾斜の箇所は多い。

ある程度客が集まったところでムーバーは発車。数分で涼山奴隷制社会博物館前に到着した。建物まではやや距離があり、また階段を上らなければならい。しばらく進むと山を背に角笛を吹く民族衣装の人物銅像が目に入る。1985年開館とのことだが、

おそらく改修を経ていたのであろう、正面入り口は鮮やかな塗装であった。身分証を提示して入館券を受けとり、館内へ。開館時間は朝8時半から夕方4時までとのことで、10時前にはすでに団体客など多くの観覧者がいた。

初めにごく簡単な通史的展示があり、社会階層（奴隷制）・慣習法・宗教・農業・家族制度・文学（文字）・風俗習慣などテーマごとに分かれた展示室が些か複雑な配置で続く。通史部分には古代遺跡の分布を図示したパネルの他に土器・青銅器・銅鼓、彝文を記した木簡や獣骨が展示されていたが、出土地や年代比定の情報は示されていなかった。漢魏晋期にかかる考古遺物の展示も多くはない。石表に関しては麟鳳碑の複製品（のみ）が出陳されていたが、解説は一切付されていなかった。総じて、明清期の土司支配に関する文書・印章等が多い印象である。近現代史部分で目を引いたのは紅軍との関わりを強調する展示であった。雲貴・四川西南部の山岳地帯は長征の経由地として知られ、文書や武器の展示によって1935年以来紅軍と彝族との間に協力関係が生まれたことを示し、その延長上に1950年の奴隷制廃止を位置付けるという配置であった。第二展示室以降は民族博物館のような趣であり、生活器具・卜占に使用する器物（羊の肩胛骨など）・装身具・彝文文献・家屋のレプリカや儀礼の動画が陳列されていた。

11時に博物館を出て、徒歩で光福寺に向かい、30分ほどで到着した。邛海を見下ろす立地であった。境内に入り、しばらく坂道を上って右手の回廊に地震碑林が設けられていた。西昌一帯では明嘉靖15年2月28日（1536年3月19日）にM7.5、清雍正10年正月3日（1732年1月29日）にM6.75、清道光30年8月7日（1850年9月12日）にM7.5の地震が発生し[16]、被災施設の再建記念や死者の墓碑として多数の石刻が残されている。1975年以来、西昌市内各地区に散在する地震石刻を蒐集して碑林が設けられ、1980年に省文物保護単位指定を受けた。現在では91点の石刻が集められているといい、資料集も刊行されている[17]。

今回は録文対校などの作業を行う準備はなかったが、地震による死去であることを明記した多数の墓碑を確認することができた（魯奇鑑・張氏夫妻墓碑など）。倒壊した寺廟の再建を記念して施主らが建てた碑文も確認できた（霊鷹寺碑・断示碑）。地震被害とそれに対する追憶、そこからの再生を記録した史料として注目されてよいと思われる。ただし残念なことに、碑を壁に塗りこめるようにして展示されているために裏側の確認は容易でない。また、回廊の壁全体を赤く塗装しようとしたようだが、塗料が流れるなどして石刻にも相当の着色が見られた。

正午前に見学を切り上げ、徒歩で下山。蛇行する車道を縫うようにトレッキングコースが整備されており、こちらを下っていく。両側には土産物屋などが並ぶ。邛海近くまで下ると、車道から分岐して直接海浜中路に出ることができた。濾山路口まで戻ったがタクシーはおらず、バスに乗車して航天大道まで戻った。車内では普通話とともに彝語と思われる自動放送が流れ、途中では民族衣装をまとった一団が乗車してきた。

ホテルまでは40分ほどかかり、午後1時ごろに到着。付近の料理店で昼食をとった。

前日の実見を踏まえて唐亮氏に再度面会し、遺跡・遺物の状況をお尋ねしたいとの希望もあったが、夕方までに連絡がつかず、再訪は断念した。午後は資料整理に充て、夕方、近隣の料理店にて夕食をとり、解散。

▼6月23日（土）西昌雨・北京晴：西昌から北京への移動

朝食後、8時過ぎにチェックアウト。8時半に迎えの車両を手配してあり、ロビーで待つ。雨天のため大通りは混雑気味。35分ごろ、車が到着。空港からホテルまでの送りと同じ車両・運転手であった。8時55分ごろ西昌青山空港着。チェックインカウンターは開いておらず、しばらく待つ。ロビーには松茸や果物を扱う売店が並ぶ。9時過ぎにチェックインが始まり、予定通りCA1498便に搭乗。ほぼ満席で、機内持ち込み荷物の制限についてアナウンスが行われた。ほぼ、10時半出発、13時25分北京着の予定通り飛行し、首都空港に到着した。北京市内に一泊し、翌日午後、羽田行きCA183便にて帰国。籾山氏も同日、セントレア行きCA159便にて帰国。

注

（1） 欧語旅行記は Glover Denis M. et. al., *Explorers and scientists in China's borderlands, 1880-1950*（University of Washington Press, 2011）が整理する（籾山明氏のご教示による）。

（2） 社会構造等については樊秀麗「大凉山彝族社会の家支制度・等級制度・婚姻制度」（『比較民族研究』20、2005年）、福本勝清「中国西南史の諸問題：涼山彝族奴隷制を中心として」（『明治大学教養論集』397、2005年）などがある。

（3） 本文に挙げた『一個考古学文化交匯区的発現』下冊第四・五章及び羅開玉『四川通史　秦漢三国巻』（四川人民出版社、2010年）を参照。

（4） 基本情報と拓本・録文は永田英正編『漢代石刻集成』（同朋舎出版、1994年）119番、毛遠明編『漢魏六朝碑刻校注』（線装書局、2008年）0386番-2巻24頁を参照。以下の発掘経緯は吉木布初・関栄華「四川昭覚県発現東漢石表和石闕残石」（『考古』1987年5期）、涼山彝族自治州博物館・昭覚県文管所「四川涼山昭覚県好谷郷発現的東漢石表」（『四川文物』2007年5期）による。『漢代石刻集成』は拓本により石高162、幅62.5、厚42㎝とする。内容は同地の郷に対する復除を認めた公文書と思しい。詳細な解釈は付記①文献を参照。

（5） 籾山氏と筆者は、2015年に角谷常子氏の主宰する科学研究費補助金基盤研究「文字文化からみた東アジア社会の比較研究」の一環として、竹内亮氏と共に西昌市を訪れる機会を得た。このときは成都市から自動車で西昌に入ったが、省道S307号線が工事中であったため、昭覚県に達することはできなかった。

（6） 成都文物考古研究所編著『成都商業街船棺葬』（文物出版社、2009年）を参照。

（7） 成都文物考古研究所・荊州文物保護中心「成都市天回鎮老官山漢墓」（『考古』2014年7期）、同「四川成都天回漢墓医簡整理簡報」（『文物』2017年12期）を参照。

（8） 注7前掲論文参照。

（9） 名称は唐亮氏の名刺による。なお後述の奴隷社会博物館が公式ウェブサイト（http://www.lsyzbwg.com/）に問い合わせ先として掲げる住所は涼山州博物館弁公区と同一である（2018年9月14日最終確認。以下、ウェブサイトについては全て同様）。

(10)　内容は前掲『一個考古学文化交匯区的発現』を参照。

(11)　一帯の地名は文献によって表記に揺れがあり、「増産村」とするものもある（俄比解放「四川省昭覚県出土的漢代画像磚石」『考古与文物』1994年 3 期）。

(12)　四開壩子一帯の遺跡群について、本稿執筆中に涼山彝族自治州博物館他「四川昭覚県四開壩子漢代遺存的調査与清理」（『考古』2018年 8 期）を得た。

(13)　Google Earth の表示によれば北緯27°56′29.05″，東経102°46′18.75″.

(14)　林声「四川涼山発現漢墓」『考古』1965年 3 期。

(15)　石表の所蔵先について、『漢魏六朝碑刻校注』は「昭覚県文化館」、2007年の報告書は「図書館」とする。百度地図は筆者らの訪れた建物を「展覧館」と表示する。四川省文化庁ウェブサイト（http://www.sccnt.gov.cn/whbmfw/sgmfkf/sntsgml/）には昭覚県図書館の問い合わせ先が掲載されているが、旅行会社を通じて確認を依頼したところ電話番号は現在では使われていないとのことであった。

(16)　前掲『一個考古学文化交匯区的発現』を参照。甘孜自治州・涼山自治州には断層帯が走り、地震の多発地帯となっている（国立天文台編『理科年表』第89冊、丸善、2015年。地179-196、204頁参照）。

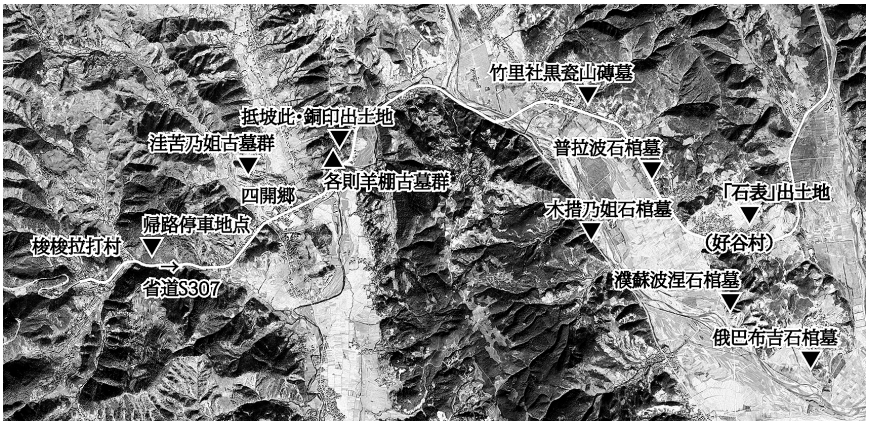
(17)　涼山彝族自治州博物館『西昌地震碑林』文物出版社、2006年。

【付記】

①調査中及び前後には籾山明氏から多大なご教示及びご助力を得た。感謝申し上げる。氏は本稿準備中に「辺境に立つ公文書――四川昭覚県出土《光和四年石表》試探」（角谷常子編『古代東アジアの文字文化と社会』臨川書店、2019年）を発表された。あわせてご覧いただきたい。

②本調査には成都博物館・李連氏、涼山州博物館・唐亮氏をはじめ、現地の研究者の方々からご支援を賜った。厚く感謝申し上げる。

③本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（17J03291）の成果の一部である。



【地図②】四開壩子一帯の道路・河道と遺跡群（Google Earth 航空写真を利用して筆者作成：左は西・西昌市方面、右は東・昭覚県城方面）

（東京大学博士後期課程在籍）